令和７年４月
堺市教育委員会

堺が進める「新たな学校のあり方」
～チームで支える、こどもの学びと育ち～
の実践に向けた取組指針

１．何のために取り組むのか（施策の必要性・背景）

～学校やこどもに関わる「身近な不安や悩み」に寄り添う～

こどもや学校に関わる不安や悩みには、いろいろなものがあります。昔から変わらないもの、時代とともに変化するものなど、学校が今後もこうした不安や悩みに寄り添い続けるには、学校もいろいろなアイデアや工夫を施しながら取り組むことが必要です。

堺市では、これらの身近な課題や悩みにどうしたらもっと寄り添えるかを考えてきました。

社会の変化

・学校はこれまでと同じでいいのか
・こどもが学ぶ内容はどうなるのか

学校規模等の違い

・できることや対応の違い
・教員の経験を積む機会の違い

中学校進学への不安

・中学校ってどんなところなんだろうか
・違う小学校の子と友だちになれるのか

～これからの社会でこどもたちが自分らしく生きるために～

社会の動きは目まぐるしく変化しており、これからの先行きも不透明です。こどもたちがこうした時代で社会を生きぬくためには、それぞれの個人が直面する状況に応じて、自ら考え、判断し、行動するための力を身に付けることが大切です。

学びの場の中心となる学校でこのような力を育むには、これまでの方法に捉われずに考えることが必要です。

これからの先行きが不透明な社会を生き抜くこどもたちに必要な資質・能力として示された3つの力

・新たな価値を創造する力
・対立やジレンマに対処する力
・責任ある行動をとる力

※「OECDラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」から

～これからの学校～

身近な不安や悩みに寄り添い、こどもたちが社会で自分らしく生きるための教育を行うには、学校教育のあり方も時代に応じて変化させることが必要です。

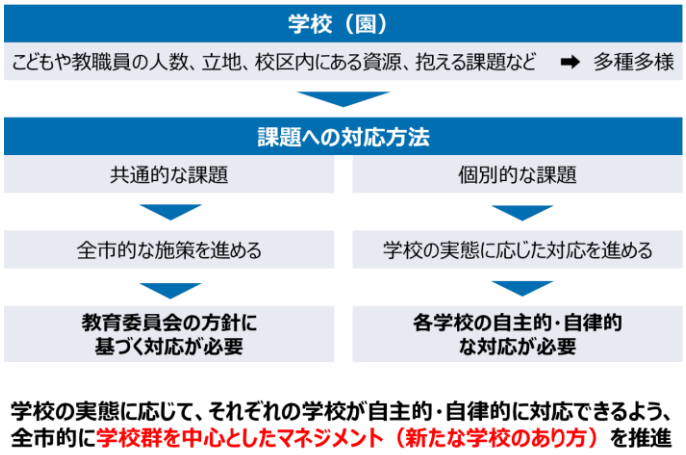
いろいろな事象に対して状況に応じた適切な対応ができるよう、学校運営の基礎力を高めるために中期的かつ総合的に学校の変革を推進することが、堺市がめざす「新たな学校のあり方」です。

2. これからの学校の姿（めざす姿）

～自主的・自律的な学校運営～

学校に関わる資源としては、こどもや教職員の人数、立地や校区内の状況など、いろいろなものがあります。共通的な課題に対しては全市的な取組を進めつつ、同時に学校の実態に応じた対応も進める必要があります。

そのためには、各学校がそれぞれの実態に応じて、自主的・自律的に対応できる学校運営が求められます。

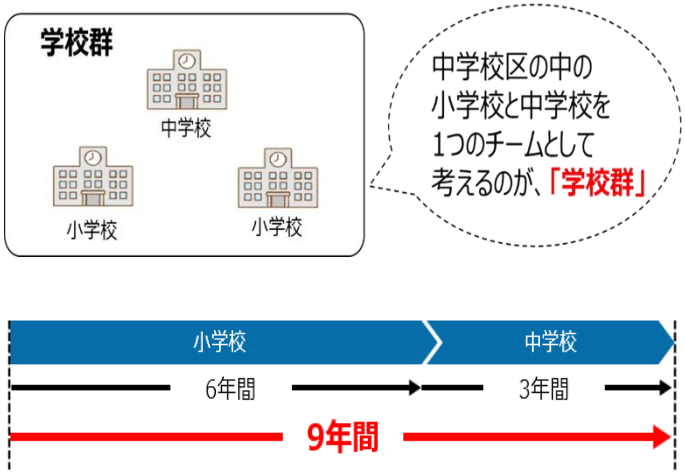


学校の実態に応じて、それぞれの学校が自主的・自律的に対応できるよう、全市的に学校群を中心としたマネジメント（新たな学校のあり方）を推進

～チームで支えるこどもの育ちと学び～

堺市では、中学校区内の小学校と中学校を１つのチームとして考えます。これを「学校群」と呼びます。小学校６年間と中学校３年間の「義務教育期間９年間」のこどもたちの学びを小学校と中学校の教職員がいっしょに考えて、「つながる教育」を行います。

「学校群」は、これまで堺市が大切にしてきた「縦につながる教育（※1）」や「横にひろがる教育（※2）」に沿った堺市独自の取組です。



※1）幼児期から小学校・中学校へのつながりや生涯にわたる学びの機会を確保することを重視する考え方
※2）学校・家庭・地域が協力して、こどもたちの学びや成長を支えることを重視する考え方

～「強み」と「資源」をいかす～

学校にはいろいろなノウハウを持った教職員や各業務について経験豊富な教職員が多くいます。それぞれの強み（専門性や得意）をみんなで共有すれば、授業や活動の質を高めることができます。

また、近隣の学校や地域の立地・環境等の資源を活用したり、地域の方々の力を頼れば、授業や活動を多様なものにすることができます。

１ つの学校で考えるより、もっと広い視点で考えることで、活用できる「強み」や「資源」が増え、選択肢を増やすことができます。

～選択肢を増やす～

小学校と中学校が １ つのチームになることで、これまで一人で取り組んできたことも、いっしょに考え活動することでいろいろなアイデアや工夫が生まれます。また、立地や環境といった資源をいっしょに使う意識が高まれば、これまでできなかったことの実現や、これまでの取組内容の充実が期待できます。

経験の浅い教職員にとっても、近隣の学校の教職員とも相談や頼ることができれば、安心して働くことができます。

3．チームとして取り組むことの効果や良さ（期待されること）

堺市では、令和 5･6 年度、8 つの中学校区（8 中学校、20 小学校）においてモデル事業を実施しました。モデル事業を通じて、これまでの学校単位の「点」の対応から、同じ中学校区のなかの小学校と中学校を 1 つのチームとして考えることで「線」・「面」といった、小・中の一体的な対応ができる環境が整いました。小学校と小学校、小学校と中学校のつながりが深まることで多くの効果が生まれ、また、こども・教職員にとっても新たな視点の獲得につながりました。

～期待される効果～

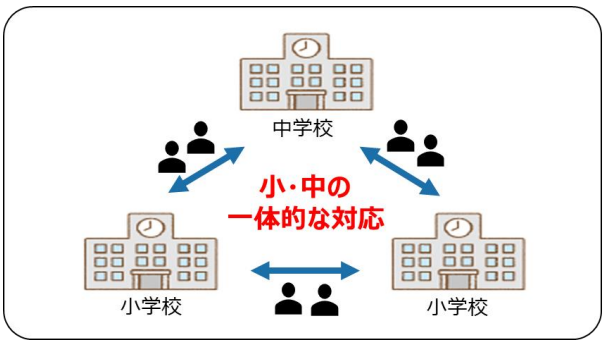
■小学校と中学校 9 年間を見通した「つながる教育」が実践できる

■小学校と小学校の連携が進み、教材の合同作成や共有、授業改善ができる

■自校以外のことを知ることで教員同士の「気づき」がめばえ、自身の授業や校務改善等、多様なアイデアや工夫を知る機会が得られる

■学校群単位で強みや資源をいかした授業や行事を考えることで、自律した学習者の育成に向け、より多様な教育活動が展開できる

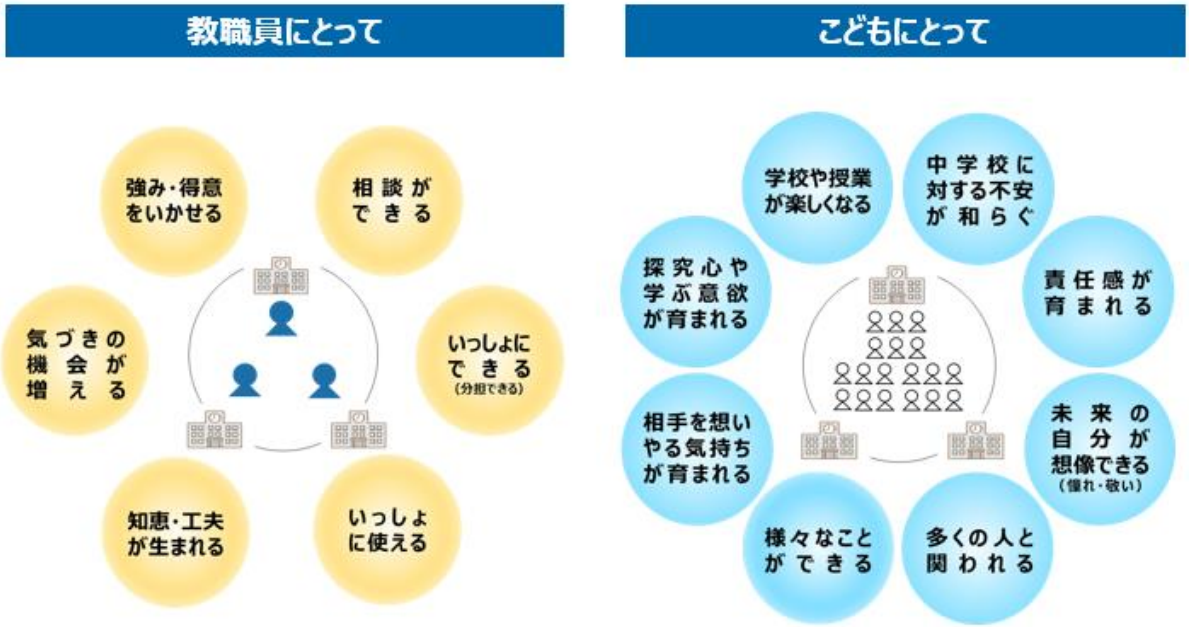
■学校のなかに同じ役割を担う教職員が少なくても、近隣の学校の教職員にも相談できる等、頼れる範囲が広がることで安心感が醸成される



それぞれの学校に勤務する教職員が、中学校区内の小学校や中学校を往来することで、小学校と小学校、小学校と中学校のつながりが深まります。

～教職員やこどもにとっての良さ～

学校群の仕組みによって小学校と中学校の教職員がチームとして取り組むことで、学校単位で考えるよりも教職員やこどもにとっての行動変容や良さが期待できます。その結果、取組や教育活動にも良い効果があると考えています。



後述の「5．これから堺市が取り組むこと」のモデル事業の実践事例で、それぞれの効果を記載しています。

4. 何を実現したいのか（「新たな学校のあり方」の目的）

チームとして取り組むことで多くの効果や新たな視点の創出が期待できます。こうした新たな学校運営ができる環境が整うことによって、これまでよりも広い選択肢の中から、それぞれの学校が必要と考える活動がしやすくなります。

～総合的な学力の育成～

堺市では、こどもたちに必要な資質・能力として、「総合的な学力」の育成をめざしています。これは、国のめざす教育の方向性と同じです。

教職員は、こどもたちに必要な資質・能力を身に付けてもらうため、日々、授業改善（どうすればわかりやすい授業になるか）やカリキュラム改善（連続性や系統性を考えた授業の展開を考えること）に取り組んでいます。

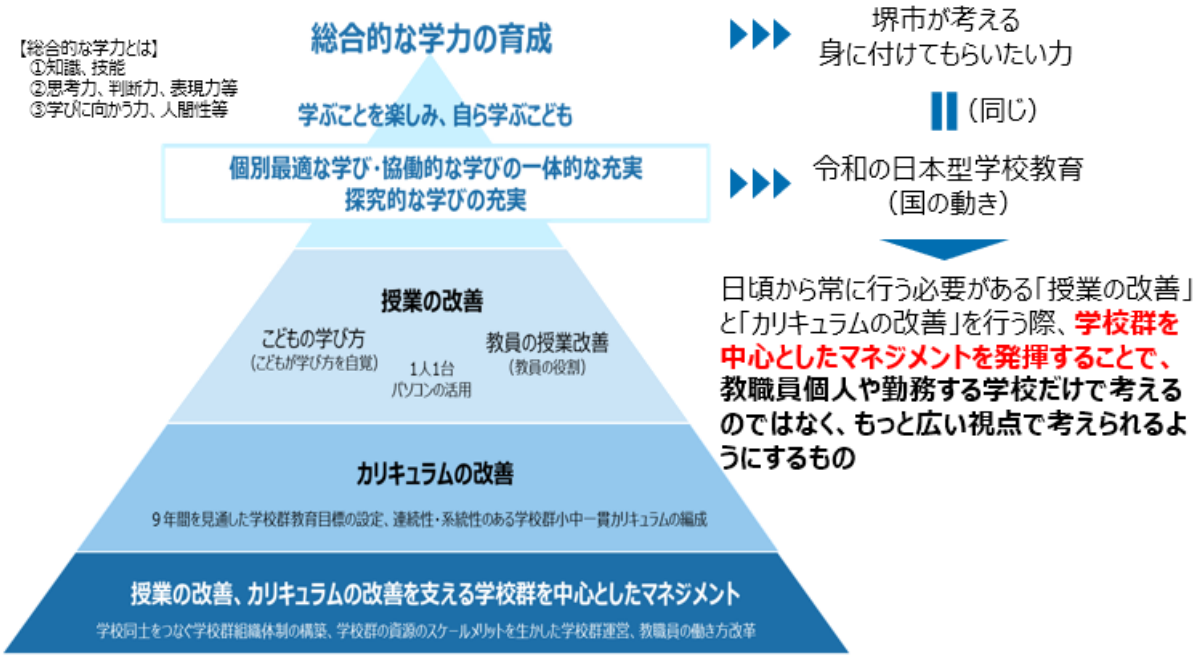
「新たな学校のあり方」の実現によって、教職員個人ではなく学校単位で考えることから、小学校と中学校がチームとなって広い視点で考えることができます。多くの「強み」や「資源」をいかし選択肢を増やすことで、効果的な授業改善やカリキュラム改善につなげます。

～多様な教育実践の実現～

小学校と中学校、小学校と小学校がチームとして取り組むことで、授業改善やカリキュラム改善にとどまらない多様な教育実践が期待できます。

例えば、生活面において進学先の中学校で大きくルールが変わったり、それぞれの小学校でルールが違ったりすると、こどもたちは戸惑います。９ 年間のなかで大きな共通ルールがあれば、こどもたちは安心でき、教職員も同じルールで指導することができます。

教職員の研修も、学校単位で行うよりも多様な視点から授業方法の研究を行うことや、多くの教職員でこどもたちを長く見守ることができるため、中期的な展望で取組を検討することができます。

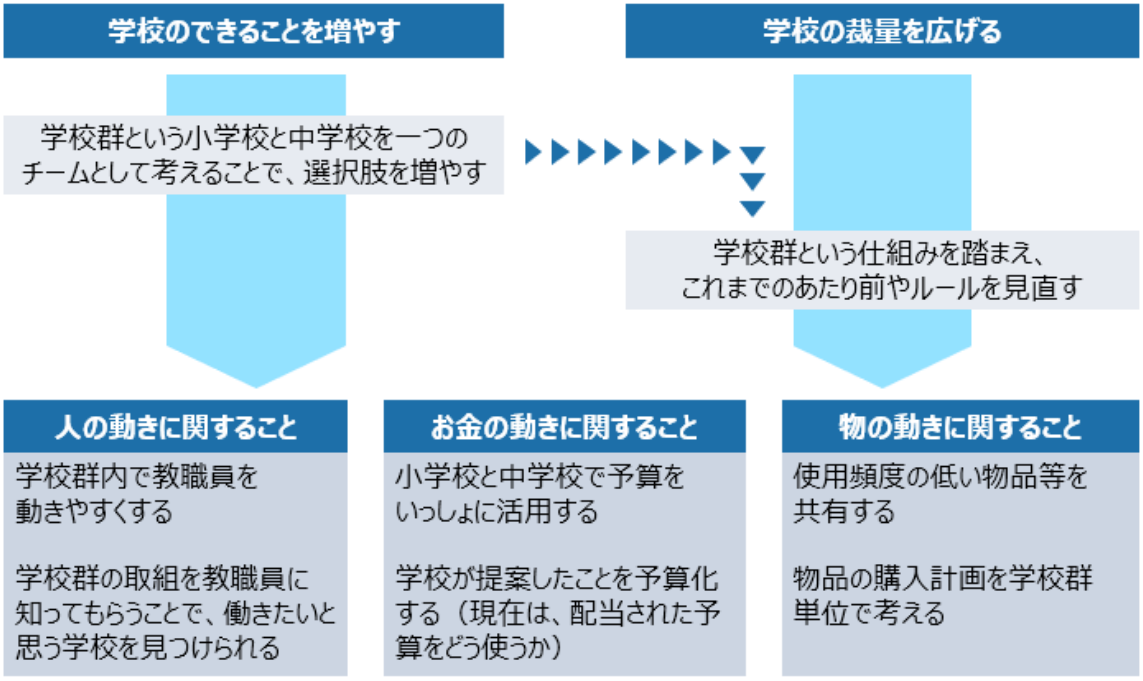


5．これから堺市が取り組むこと

～学校のできることを増やす、学校の裁量を広げる～

自主的で自律的な学校運営を行うには、学校の実情に応じた取組を学校自らが考え、実践できる環境であることが大切です。そのためには、学校のできることを増やすことと学校の裁量を広げることが必要です。

同じ中学校区のなかの小学校と中学校がチームとして取り組むことで、それぞれの「強み」と「資源」を活用し、できることを増やします。また、学校群の仕組みを踏まえ、これまでのあたり前やルールを見直します。



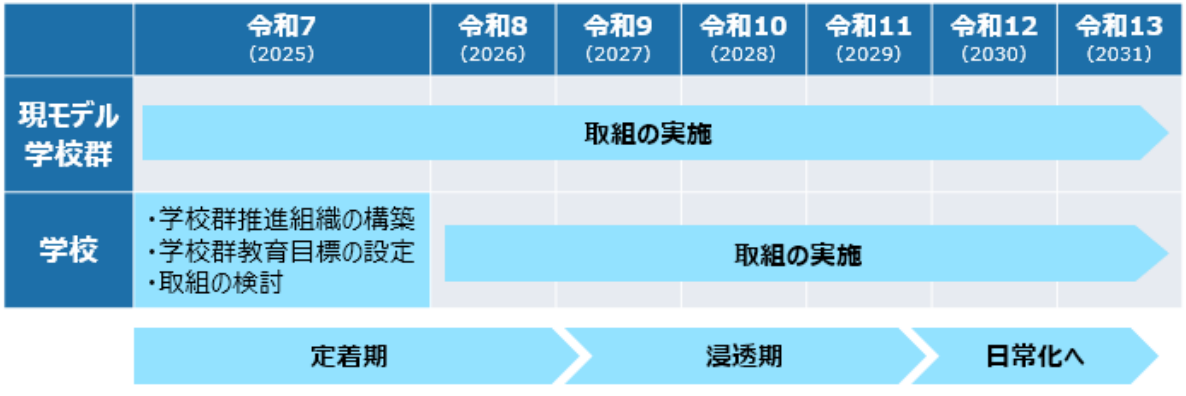
～中期的展望をもって進める（定着・浸透・日常化のプロセス）～

堺市で進める「新たな学校のあり方」は、令和７年度から始まります。

同じ中学校区の小学校と小学校、小学校と中学校のつながりを深めるため、まずは、対話・コミュニケーションによる相互理解を図ります。相互理解によって、教職員は、さまざまな気づきを発見します。気づきから相談・連携の機運を高め、それぞれの学校で必要と思う取組をともに考え、実践するというサイクルが生まれます。試行錯誤を繰り返しながら、それぞれの学校群として必要と思うことが実践できるようにします。

こうしたサイクルを確立するためには、一定の期間が必要です。

まずは、学校群の仕組みの定着を図り、徐々に浸透させ、将来的にはチームで取り組むことが自然なことになるよう、堺市が進める「新たな学校のあり方」は、今後５年程度の中期的展望をもって進めます。



＜参考＞　モデル事業の実践事例から見る学校の姿

堺市では、令和 5･6 年度、8 つの中学校区（8 中学校、20 小学校）においてモデル事業を実施しました。各学校群では、これまで大切にしてきたそれぞれの学校の取組を尊重しながら、各学校群の「強み」や「資源」をいかして、めざす子ども像の実現や抱える課題への対応に向けた取組を行いました。

学校群･学校名		軸となるテーマ
陵　西	陵西中学校 少林寺小学校 安井小学校 大仙西小学校	人権教育･キャリア教育を中心とした小中一貫教育体制の推進
旭	旭　中　学　校 神石小学校 大仙小学校	地域資源を生かした子ども堺学を軸とした 9 年間を見通した探究学習の充実
若松台	若松台中学校 上神谷小学校 若松台小学校 茶山台小学校	小規模校における教科担任制の導入、小中一貫教育による学力向上
三原台	三原台中学校 三原台小学校 泉北高倉小学校	特別支援教育の視点に立った誰一人取り残さない教育の実施
五箇荘	五箇荘中学校 五箇荘小学校 五箇荘東小学校 新浅香山小学校	学力向上に向けて 9 年間を見通した取組実施
月　州	月州中学校 三宝小学校 錦西小学校 市　小　学　校	9 年間を見通した情報活用能力の育成に向けた授業改善
八田荘	八田荘中学校 八田荘小学校 八田荘西小学校	互いを認め合い、支え合える集団づくりをめざした生徒指導体制の構築
赤坂台	赤坂台中学校 赤坂台小学校 新檜尾台小学校	総合的な学習の時間･道徳を中心とした 9 年間を見通したカリキュラム･マネジメント

また、モデル事業の実践事例から見る学校の姿をご紹介します。

～①普段の授業準備や実践～

これまで
（一般的な対応）

教員がひとりで教材を作成し、授業を進める。

これから
（モデル学校群の取組から）

実際に行われている授業（一例）

A校の教員

資料をファイルに入れておきましたので、もし使えるところがあれば、ぜひ活用してください。

B校の教員

資料ありがとうございました。早速使わせていただきました。感謝です。

普段の教員同士の普段のやりとり
（実際のやりとりを一部加工）

- 学校群内の教員がいっしょに授業計画や教材の案を考え、授業で使用する資料を共有する。
- 教員の強みや得意をいかした教材を活用することで、個人の授業準備の負担軽減や質の高い授業が期待できる。

教職員：強み・得意をいかせる／いっしょにできる（分担できる）／いっしょに使える

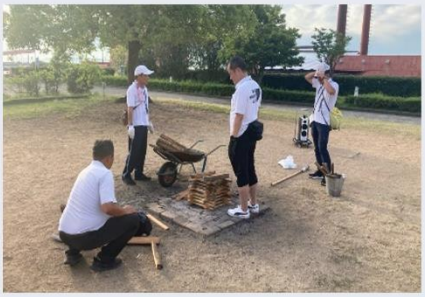
こども：学校や授業が楽しくなる／探究心や学ぶ意欲が育まれる

～②複数の学校による合同実施～

これまで
（一般的な対応）

学校単位で様々な行事を企画・実施する。

これから
（モデル学校群の取組から）



キャンプファイヤーの準備をする教頭たち

熱中症対策をする教職員

- 学校群内の教職員がいっしょに行事の企画や準備を行い、実際の行事を行う。
- 大人数による行事の魅力向上や、小学校段階から中学校で出会う友だちとのつながりが生まれるなど、1つの学校ではできなかった取組を行う。

教職員：いっしょに使える／いっしょにできる（分担できる）

こども：学校や授業が楽しくなる／様々なことができる／相手を想いやる気持ちが育まれる

～③生活面からのつながり～

これまで
（一般的な対応）

学校ごとに、学校のきまり（お約束）やルールを決める。

これから
（モデル学校群の取組から）

中学校の教職員が小学生に説明

学校群のお約束（抜粋）

小学校から中学校まで同じものを共有

- 9年間でこどもの成長を見られるよう、共通の考え方を基に継続した取組を行う。
- こどもたちにとって、生活面でのきまりやルールの急激な変更がないことで、スムーズな中学校進学につながる。

教職員		こども	
いっしょに使える	気づきの機会が増える	中学校に対する不安が和らぐ	多くの人と関われる

～④同じ課題にともに取り組む～

これまで
（一般的な対応）

学校単位で様々な行事を企画・実施する。

これから
（モデル学校群の取組から）

防災・減災の授業の一環で、
煙体験を行う小学生と中学生

小学生と中学生による
防災・減災に関するディスカッション

- 地域や関係機関と連携して、学校だけではできなかった取組を行う。
- 小学校と中学校のこどもたちが、同じ体験や話し合いを通じて、お互いが関わりながらいっしょに学ぶ。

教職員			こども		
いっしょにできる（分担できる）	強み・得意をいかせる	気づきの機会が増える	未来の自分が想像できる（憧れ・敬い）	様々なことができる	中学校に対する不安が和らぐ

～⑤教職員の研修～

これまで
（一般的な対応）

校内で研修を実施する。また、各学校で対応を考えて実践する。

これから
（モデル学校群の取組から）

オンラインを活用した教職員研修

小学校の給食準備を直接見て、
準備に備える中学校教職員

- 共通した内容をいっしょに考えて実践につなげる。
- 小学校と中学校のそれぞれの強みをいかした対応を行う。

～⑥対話・コミュニケーションによる「相互理解」から生まれる教育実践～

＜教員の専門性（強み）をいかした授業＞

- 中学校の英語科教員が、小学校で英語の授業を実施
- 教員の専門性をいかし、わかりやすい授業ができます

＜中学校の強みをいかした早期からの情報伝達＞

- 中学校教員による、小学6年生の保護者を対象とした高校の進路説明会を実施
- 中学校と連携することで、早い段階から情報を伝達することができます

＜資源をいかした授業＞

- 校区内に田んぼのない小学校のこどもたちが、田んぼのある小学校を訪問
- 資源を有効活用することで普段ではできない体験ができます

＜共同で取り組む授業＞

●連合運動会の前に学校群内の小学校同士の綱引き等の練習を実施

●学校単位ではできなかったことが、共同では行うことができます

＜オンラインを活用したこどもの交流＞

●オンラインで別の小学校のこどもたちによる発表を観て、チャット機能も活用しながら感想を伝達

●普段とは違う雰囲気のなかで授業を行うことができます

＜参考＞モデル事業を通じて聞かれた声等

～こどもたちの声～

・中学校の先生が小学校に来てくれるので、中学校の話をいろいろ聞くことができて安心した。（小 6 児童）

・中学校に進学したとき、知っている友だちや先生がいて安心した。（中 1 生徒）

・交流授業を通じて他の小学校の友だちの発表が聞くことができて良かった。（小 5 児童）

～教職員の声、教職員から見たこどもの姿～

・学校群内の小学校の友だちにどう伝えるか、いつも以上に工夫しようと取り組んでいた。（小学校教職員）

・学習指導案や教材・教具を共有することで授業の質の向上を図ることができた。（小学校教職員）

・小学校の行事に中学生が参加したことで、こどもたち主体で行事運営ができた。（中学校教職員）

～保護者等の声～

・こどもが中学校に進学した際、知っている友だちや先生がいて安心している姿を見ることができた。（保護者）

・幼稚園の頃からの友だちに久しぶりに会えて楽しかったとこどもが嬉しそうに話してくれた。（保護者）

・隣の校区のこどもたちと仲良く学んでいる姿が嬉しい。（地域の方）